

F. Scott Fitzgerald 作品における「車」—*The Great Gatsby*を中心に—

高田 佳門*・松村 聡子**

TAKADA Kamon and MATSUMURA Satoko

はじめに

F. Scott Fitzgerald (1896-1940)が精力的に小説の執筆を始めた 1920 年代のアメリカは、人々の移動手段としての主流が、馬車から自動車へと変わる移行期間にあった。それまでは主に富裕層しか自動車を所有することができなかったが、大量生産・大量消費時代の到来によって、庶民層の人々も自動車を運転するようになった。そのような時代に活躍した Fitzgerald の作品の中では、自動車やそれを運転する人々が多く描かれている。本論では、Fitzgerald 作品において、「車」がどのような役割を持っているのかについて考察していきたい。

1 試金石としての「車」

彼の短編集 *All the Sad Young Men* (1926)の中の“Winter Dreams” (1926)という作品の中では、Judy Jones という女性が、主人公である Dexter Green がどんな車に乗っているのかを聞いている、以下の場面がある。

“Have you a car here? If you haven't, I have.”

“I have a coupé.”

In then, with a rustle of golden cloth. He slammed the door. Into so many cars she had stepped—like this—like that—her back against the leather, so—her elbow resting on the door—waiting. (59)

物語の序盤で Dexter は Judy と出会い、彼女のあまりの美しさに虜になるが、彼女の周りには常に彼女を慕う男性が絶えず、Dexter は彼女を諦め、別の女性である Irene Scheere と婚約する。約一年半後に Dexter は Judy と再び出会うことになる。その後彼女は、Dexter が持つクーペに乗り込んでいる。クーペは当時から現代にかけて販売されている高級車である。“Into so many cars she had stepped”という表現からも、Judy は多くの男性の車に乗ったことがあり、彼女はその男性が車を買えるほど裕福であるかどうか、またどの程度高級な車に乗っているのかを、短いやりとりから探っているということがわかる。このように、Fitzgerald 作品では、当時流行していた自動車が、物語の登場人物において、生活水準や地位を示す、試金石のような役割を担っている。

2 *The Great Gatsby* (1925)より一語り手 Nick における「車」の運転—

Fitzgerald の作品において、車が持つ意味合いは、それを所有する人物の生活水準や地位だけではな

* 岐阜大学教育学研究科

** 岐阜大学教育学部英語教育講座

い。それを運転する人物の人間性においても、重要な意味を持っている。彼のもっとも有名な作品の一つである、*The Great Gatsby*の中でも、多くの場面で車が運転されている。この作品において、語り手の Nick Carraway は、物語と読み手の間だけではなく、物語に登場する人物同士の間立つ、仲介としての役割を成している。第五章において、Daisy Buchanan と Jay Gatsby は二度目の出会いを果たすが、ここでも Nick は、仲介役として彼の家二人を招き、同席している。また第四章で Gatsby と Tom Buchanan がニューヨークで出会う場面でも、Nick が二人をそれぞれ紹介している。このような仲介役をこなしていく中で、彼は登場人物の人間性について思いを巡らせ、読者にその考えを伝えてくれる。その中で彼が他人の人間性を判断する材料として、登場人物の車の運転の仕方に重きを置いていることが、いくつかの場面からうかがえる。第七章の Buchanan 邸での食事の場面において、Gatsby は Daisy を完全に自分のものにするために、彼女とその夫である Tom の仲を引き裂こうと試みる。当初の Daisy も Tom のもとから離れ、Gatsby についていく心づもりでいたが、彼女を自分のものにするという、Gatsby のあまりに強すぎる要求に耐えられなくなり、泣き崩れてしまう。Gatsby を拒絶した Daisy に対して、Tom は Gatsby と同車して帰るように命令する。その後動揺したまま運転する Daisy は、Tom の浮気相手である Myrtle Wilson を轢き殺してしまうのである。事故を起こし呆然とする Daisy を見た Gatsby は、ひとまず車を隠し、自分がその車を運転していたことにすることを、Daisy に提案している。だがその結果、Myrtle を轢き殺した犯人であると勘違いされた Gatsby は、彼女の夫である George Wilson によって射殺されてしまう。以上のような成り行きで、Gatsby は命を落とすが、この一連の出来事に関する Nick の語りから、彼は Gatsby を死に追いやったのは Tom と Daisy である、と考えていることがうかがえる。というも以下の場面において、Nick は Buchanan 邸のキッチンで、Tom と Daisy がなんらかの陰謀を企てている様子を目撃しているからである。

Daisy and Tom were sitting opposite each other at the kitchen table, with a plate of cold fried chicken between them, and two bottles of ale. He was talking intently across the table at her, and in his earnestness his hand had fallen upon and covered her own. Once in a while she looked up at him and nodded in agreement.

They weren't happy, and neither of them had touched the chicken or the ale — and yet they weren't unhappy either. There was an unmistakable air of natural intimacy about the picture, and anybody would have said that they were conspiring together. (115)

その後 Gatsby の葬式が終わり、Nick と Tom は街で偶然会うことになる。以下の引用ではそこでの二人の会話が描かれており、ここで Nick は、Myrtle を殺した犯人が Gatsby であるという、偽りの情報を George に伝えたのが Tom であることを知る。

“Tom,” I inquired, “what did you say to Wilson that afternoon?”

He stared at me without a word, and I knew I had guessed right about those missing hours. I started to turn away, but he took a step after me and grabbed my arm.

“I told him the truth,” he said. “He came to the door while we were getting ready to leave, and when I sent down word that we weren't in he tried to force his way up-stairs. He was crazy enough

to kill me if I hadn't told him who owned the car. His hand was on a revolver in his pocket every minute he was in the house—" He broke off defiantly. "What if I did tell him? That fellow had it coming to him. He threw dust into your eyes just like he did in Daisy's, but he was a tough one. He ran over Myrtle like you'd run over a dog and never even stopped his car."

There was nothing I could say, except the one unutterable fact that it wasn't true. (142)

Myrtle を轢き殺したことを、Daisy が Tom に打ち明けたのかどうかは不明である。しかし Nick はその事実を、Tom は知らないと考えているようである。George が Gatsby を殺そうとしていることが分かるこの場面で、真実を打ち明けなかった Daisy、そして Gatsby の死への決定打となった George との会話を悪びれる様子もなく告白する Tom、この両者の人間性に対して、Nick は強い嫌悪感を抱いている。彼は Gatsby を死へと追いやった Tom と Daisy について、以下のように語っている。

They were careless people, Tom and Daisy—they smashed up things and creatures and then retreated back into their money or their vast carelessness, or whatever it was that kept them together, and let other people clean up the mess they had made.... (142)

この語りにおける“carelessness”とは、Tom の浮気や Daisy の裏切りなどのような、行動選択における「不注意さ」と同時に、車の運転における「不注意さ」もまた意味していると考えられる。このように Nick は、Gatsby、そして Jordan に対しても、それぞれの車の不注意な運転から彼らの人間性を判断していく。Daisy が Myrtle を轢き殺した夜、精神的な負担を受ける Daisy の様子を心配する Gatsby は、Buchanan 邸にいる Daisy を外から見守ることにする。そこを通りかかった Nick は、Gatsby にそこで一体何をしているのかと問いただす。以下の引用は、二人が言葉を交わす場面と、それに対する Nick の見解である。

“What are you doing?” I inquired.

“Just standing here, old sport.”

Somehow, that seemed a despicable occupation. For all I knew he was going to rob the house in a moment; I wouldn't have been surprised to see sinister faces, the faces of “Wolfshiem's people,” behind him in the dark shrubbery. (114)

家の外から中を物色する Gatsby を見て、Nick は彼が Buchanan 邸に泥棒に入ろうとしていると一瞬考えてしまう。その後の会話において、Gatsby は事故現場を誰にも目撃されていないだろうと Nick に語る。実際には数人に目撃されていることを Nick は知っていたが、彼はこの事実を Gatsby に知らせようとしなない。「そのときには僕はもう彼にほとほとうんざりしていたので、間違いを正してやる必要性すら感じなかった。」(114)*と語っている。この場面から、Nick が Gatsby に対して、一時的にはあるが批判的な印象を持っていることが分かる。この時点で Nick は、車を運転していたのが Daisy であるという

*本論では、*The Great Gatsby* (1925)の日本語訳を引用する際、括弧内に、原本である Oxford 版のページ数を記載している。なお、日本語訳は村上春樹訳を使用している。

事実を知らされてはおらず、Gatsby が運転していたものと思っているはずである。その後すぐにこの誤解は解け、Nick の Gatsby に対する評価は回復する。Gatsby が死ぬ直前の二人の最後の会話で、Nick は Gatsby に対し、「誰も彼も、かすみたいなやつらだ」(122)、「みんな合わせても、君一人の値打ちもないね」(122)という言葉投げかける。このように、不注意な運転が、Gatsby の人間性についての批判的な印象を、一時的に Nick に持たせていると考えられる。

また第三章においては、Nick は Jordan Baker と出会い、彼女に心惹かれる。ある時彼女は他人から借りた車を、屋根を開けたまま雨の中に放置し、そのことについてうそをついたということを、Nick は思い出す。そして彼は続けて、Jordan との車の運転についての会話を思い出す。

“You’re a rotten driver,” I protested. “Either you ought to be more careful, or you oughtn’t to drive at all.”

“I am careful.”

“No, you’re not.”

“Well, other people are,” she said lightly.

“What’s that got to do with it?”

“They’ll keep out of my way,” she insisted. “It takes two to make an accident.”

“Suppose you met somebody just as careless as yourself.”

“I hope I never will,” she answered. “I hate careless people. That’s why I like you.” (48)

ここで Nick は Jordan に一時的に好意を抱くが、それと同時に、彼女に対して不正直であるという評価を下している。この章の最後で彼は自分の持つ美德について、自分が正直であることを挙げ、世間には正直者はほとんど見当たらないと語っている。以下の引用から、彼の持つ自分自身に対する考え方と、周りの人物に対する考え方がうかがえる。

Every one suspects himself of at least one of the cardinal virtues, and this is mine: I am one of the few honest people that I have ever known. (48)

先ほどの Daisy と Tom、そして Gatsby に対する時と同じように、Nick はある人物の人間性とその人の車の運転の不注意さを、関連性を持たせて考えているということがうかがえる。当の Nick が車を運転している場面は一か所のみであり、第一章で彼が Buchanan 邸に招待されたときに車を運転していた場面に限られている。そのほかの場面では、彼は他の人物の運転を見守り、その人物の人間性を判断しているのである。

3 Nick と Jordan における皮肉—Nick の価値観—

しかし一方で、運転の不注意さを指摘された Jordan もまた、その人の人間性と車の運転の不注意さを関連付けて考えている。第七章において、Myrtle が轢き殺されてしまう事故の後、Tom、Daisy、Jordan が Buchanan 邸に入っていく中、その日の出来事にうんざりしていた Nick は、Buchanan 邸に入ることを拒絶する。そして中に入ることを進める Jordan に対しても、冷たい態度をとってしまう。彼は自分が

うんざりしていた「誰も彼も」の中に、**Jordan** もも含めてしまっていることに気付く。以下の引用ではその時の彼の心中が語られている。

“Won’t you come in, Nick?”

“No, thanks.”

I was feeling a little sick and I wanted to be alone. But Jordan lingered for a moment more.

“It’s only half-past nine,” she said.

I’d be damned if I’d go in; I’d had enough of all of them for one day, and suddenly that included Jordan too. She must have seen something of this in my expression, for she turned abruptly away and ran up the porch steps into the house. (113)

Jordan は物語の中で起こる出来事や、人間関係に対して中立な態度を示している。そんな彼女に対してさえも、うんざりしてしまっている **Nick** の様子はとても印象的であり、だからこそ第三章において、彼女の不注意な車の運転を見て **Nick** が下した **Jordan** に対する評価が、彼女に対する彼のこのように拒絶的な態度に寄与しているといえるのではないだろうか。しかしながら、この態度を見た **Jordan** もまた、**Nick** に対して不誠実であるという評価を下している。第九章において、**Gatsby** の葬式が終わり、故郷に帰ることを決める **Nick** は、その前に一度だけ **Jordan** と会話をしている。以下の **Jordan** の台詞からは、彼女の **Nick** に対する失望の念がうかがえる。

“You said a bad driver was only safe until she met another bad driver? Well, I met another bad driver, didn’t I? I mean it was careless of me to make such a wrong guess. I thought you were rather an honest, straightforward person. I thought it was your secret pride.” (141)

ここで **Jordan** は、**Nick** の行動選択の不誠実さを、“a bad driver”という言葉で表している。実際の「交通事故」とは別の次元での、人と人との営みにおいて起こる「事故」を表現しているのである。この物語の中で、**Nick** は語り手の役割を担い、登場人物の人間性を判断してきた。その彼から不正直であるという判断をされた **Jordan** に、彼自身が不誠実であると評価されていることは皮肉といえるだろう。以上のことから、**Nick** の持つ、人生における一つの価値観を推測することができる。それは人としてどうあるべきか、というのは運転と似ていて、不注意な運転をしてはもう一人の不注意な運転手とぶつかり、衝突が起きてしまうということである。言い換えれば、不当な生き方をしているは、もう一人の似たような人間と出会い、衝突してしまうということである。しかしながら、この価値観について考えた場合、そこにある矛盾についてもまた考えなければならない。正しい生き方をしたいと願う **Nick** においてもまた、**Jordan** との衝突が起こってしまっているという矛盾である。衝突は避けられないのである。また物語の最後に彼は、以下の言葉で結んでいる。

So we beat on, boats against the current, borne back ceaselessly into the past. (144)

このように、彼が人生を車ではなく、ボートの運転手に例えていることは興味深く思える。どんなに正し

く生きようとしても衝突は避けることはできない。だからこそ彼は人生をボートの運転に例え、避けることのできない波にぶつかりながら、それでも希望を失わずに生きていくことの大切さを、読者に伝えているといえるのではないだろうか。物語を通して、Nick は様々な出来事を経験し、自分の中の価値観を見つめなおしている。その中で彼は、その人物の人間性を、車の運転というフィルターを通して見つめているのである。

おわりに

本論では、「車」という存在が持つ、Fitzgerald 作品における役割について考察してきた。1920年代当時において、個人の移動手段として画期的な発明品であった自動車を持つ意味合いは、現代における自動車が持つそれよりも、はるかに重大であったように感じられる。大量生産・大量消費時代の到来において、あらゆる物体がそれを所有する人物の価値をより顕著に表すようになり、このことは現代にも通ずるところがあるといえるだろう。作品を通して、Nick は登場人物の仲介の役割を果たしているが、リチャード・リーハン は Nick について、「彼はギャツビーの世界とビュキャナン夫妻の間を仲介するだけでなく、テキストと彼を語り手として用いるフィッツジェラルドの間をも仲介する」(リーハン 169-170)と述べている。*The Great Gatsby* だけではなく、Fitzgerald 作品の多くが、彼の実体験に依った自伝的作品であると多くの批評家からみなされている。彼のような自伝的趣向の強い作家の作品において、今回の「車」のような、作品の時代を象徴する物体や事象に焦点を当てて考察することは、その作家が伝えたかったことを読み取ることにあたって、重要なことであるといえるのではないだろうか。

引用文献

- Fitzgerald, F. Scott. *All the Sad Young Men*. 1926. London: Alma, 2013. Print
 Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. New York: Oxford UP, 1998. Print.
 フィッツジェラルド, スコット. 『グレート・ギャツビー』 村上春樹訳. 東京: 中央公論新社, 2006. Print.
 リーハン, リチャード. 『「偉大なギャツビー」を読む—夢の限界』 伊豆大和訳. 東京: 旺史社, 1995. Print.

参考文献

- Curnutt, Kirk *The Cambridge Introduction to F. Scott Fitzgerald*. Cambridge: Cambridge U P, 2007. Print,
 Pekarofski, Michael. "The Passing of Jay Gatsby: Class and Anti-Semitism in Fitzgerald's 1920s America." *The F. Scott Fitzgerald Review*, Vol. 10 (2012): 52-72. Print.
 Prigozy, Ruth. *The Cambridge Companion to F. Scott Fitzgerald*. 2002. Cambridge: Cambridge U P, 2008. Print.
 村上春樹. 『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』 東京: 中央公論社, 1991. Print.
 リーハン, リチャード. 『「偉大なギャツビー」を読む—夢の限界』 伊豆大和訳. 東京: 旺史社, 1995. Print.